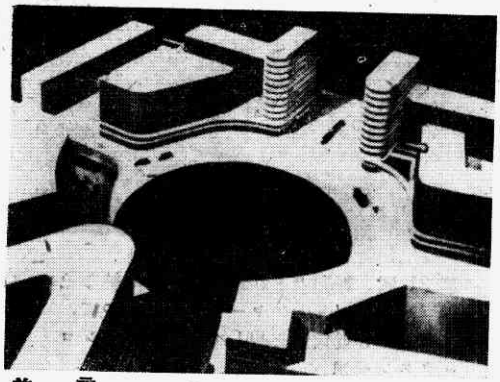


都市美技法の展望

石川榮耀

前言

都市計畫の歴史は都市美技法の歴史といえる．それは獨裁君主の威容の誇示にはじまり，大衆の「保健觀的都市美」にいたるまで幾變遷してきた．

人間はその居住の常に美しくあらんことをのぞむ．われわれの生命が美なるべき意圖を持ち，それを環境にも求めてやまない結果なのであろう．

この意味において都市美はさらに科學的に研究され，また社會の支持を得，政治の正面に進出し，文化日本建設の主題目となるべきものである．

I 都市美技法史

都市美の技法を史的に概括すれば，古代技法——中世技法——近世（ルネッサンス）技法——現代技法（田園都市技法・カンベラ技法・綠地技法・コルビュジェ技法）——にわけ得る．もつともこの中，古代・中世はともに正確にいえば技法史をなさない．すなわち古代バビロン期のものおよびギリシャ・ローマ期のものは，都市全體が意識的に都市美の觀點から計畫されたというよりは，古代においては王城および王城附屬道路が他と無關係に局部的に美化されたにすぎず，ギリシャ・ローマにおいても，都城の一部の神殿，ないし廣場周圍の施設が孤立して美化されていたにとどまる．したがつて都市美技法としては史的痕跡の研究の對象となるにすぎない．また中世においても，史實としての都市美的技法の存在は明らかでない．

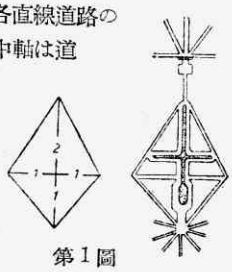
結局技法史としては，意識的に都市美を構成しようと試みた「近世」からはじめるのを妥當とする．次に現代については，技法としては未だ試みの程度のものが輩出しつつあるにすぎないが，それぞれ都市美的に意識されまた史的展開上重要な意味もあるので，この項だけは特に細分して解說することにする．またその中特にコルビュジェの考方は，きわめて觀念的にすぎるが，史的展開上正統線の上にあり，將來を示唆するものが多いので考慮の對象とした．

(1) ルネッサンス技法

都市全體が意識的に都市美的に計畫されたのはルネッサンス期にはじまる．それはルネッサンスの文藝復興の潮流にのるとともに當時の世界情勢により都市國家の基地であることより廣域國家の一細胞に解放された都市が

イ 時代美意識の覺醒 ロ 人口增加にともなう建築の要求 ハ 交通の漸增 ニ 綠地趣味の涵養 ホ 改造餘地の擴大

等の諸因に刺戟され，直線道路・放射線・廣場・端景美（裝飾建築）などによる都市技法を案出したのにはじまるのである．もつともその技法は當初は造園の鬼才ルノートルによりヴェルサイユ宮苑として創設された（1662～1668）もので，Kite shape と稱する構法をもつていた．（第1圖參照）この場合，各直線道路の中，斜邊はそれぞれ並木道，中軸は道路ないし水路である．またすべての交點は廣場になつており，そこにはかならず彫刻や噴水等美的施設が設置してあつた．



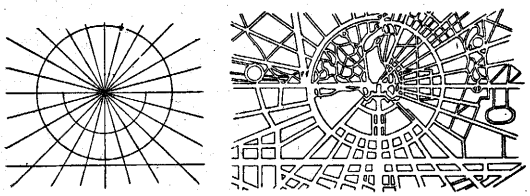
第1圖

この名園の設計が放膽にも都市計畫技法となつたのは，實にランファン少佐の神才によるのであつた．彼はフランス人であるがアメリカ獨立戰爭に從軍し，たまたま首都ワシントンの設計を擔當することになり，母國の名苑ヴェルサイユの技法を採用し成功した．（1791）．ただワシントンの場合は，各交點の廣場はそれぞれ白聖館・議事堂およびリンコルン堂などの建築施設となつている．

このワシントン構法が再轉してランファンの鄕土舊大陸に入り，1856～1870 年のパリ改造計畫になつたのはまことに興味が深い．ここでは Kite shape は凱旋門，オペラ，ルーブルの3建築を焦點とし中央軸を大並木路とし，パリの一部として形成された．ただパリ計畫においては，ヴェルサイユ技法の應用が全市に美的焦點としてゆきわたり，これにブルヴァール（城實跡の環狀道路）が新しい技法として全構造を美しくひきしめることになつた．

かくしてこれらのルネッサンスプランはそれぞれの機會を通して各方面に影響したのである．その中初期の放射線構成はそのいちじるしい例として，カールスルーエを造つたが，ここでは 36 本の放射線が王宮を中心に放射して人目を驚かしている（第2圖參照）ただこの設計における焦點は中心たる王城であり，それ以外にはさして美的な扱いがない．このために，景觀は單調に墮し，技法としてはむしろ失敗の適例とされている．

またヴェルサイユ，ワシントンと傳承され，パリにおいて強調された都市美的中央軸は，ベルリンのブランデンブルグ門よりチアガルテンをつらぬく直線道等の形で，いたるところに模倣された．



第 2 圖

またパリにはじまる環狀道路（ブルヴァール）は，ウイーンをはじめとしてライン沿岸の各都市から，ネーデルランド地方の大都市を飾ることになつたのである．

(2) 田園都市技法

以上ルネッサンス技法はきわめて華麗ではあるが，そのどこかに生硬の感をまぬがれ得ないところがある．その原因は，幅員均等な直線道路を基調とするため，景觀に變化を缺く結果であろう．

一方チュートン系の民族に屬しかつ傳統性の強い英國人は，この形式を飽きたらずとし，ドイツ中世都市の形態の中に自らの性格にふさわしい手法を發見することになつた．すなわち彼等は，この中世の自然發生的な都市景觀の中に都市美的に計畫された痕跡ありとし，ニュールンベルグ等を研究の對象としてその實證につとめた．そしてついにこれを現代化し，別に新中世主義とも稱すべき技法を創設したのである．

その大成者は英國のレイモンド・アンウィンである．彼にしたがえば，中世都市の道路が迂曲し，その幅員が廣狹まちまちであるのは，廣場効果および景觀の變化を企圖した結果で，それはむしろきわめて高度な技法として尊重されてよいとするのである．

この中世技法の研究は，名著 Town planning in practice に盡してあり，それを現代化した技法はロンドン郊外ハンプステッドの田園郊外および田園都市レッチウォースに實現されている．そしてこの技法は，今日大なり小なり世界の住宅地計畫の主技法になつている．

(3) カムベラ技法

田園都市技法はしばらく住宅地の建設の唯一のものとして用いられたが，1911 年オーストラリヤの首都カムベラが懸賞設計を募集した時，ウォルター・グリフィン（シカゴ）は新しい技法に基く設計により一等に當選した．

その計畫の骨格はルネッサンス技法であるが，その中に Water axis, Land axis なる都市美技法が示されてあり，これは既往の技法に大きく修正を加えるものである．すなわちここでは，各地區ごとに放射線狀道路が組まれているが，その中議事堂から北西に走る見透し線はるか郊外のエンスリー山を端景におさめ，その線にそつて議事堂に從屬する各官廳の建築群が配列されており，強い都市美軸をなしている．それをここでは陸景軸 (Land axis) とよんでいる，

この Land axis に直角に水景軸 (Water axis) があり，これは議事堂前景の裝飾水面の上に組まれており，その一端は湖畔の大學他の端は湖上に消える．

この技法はもちろんルネッサンス技法の發展であるが外景をとり入れたところに劃期的な前進がある．いうまでもなくそれはルネッサンス以來の強い意欲であるところの「自然導入」の精神の發展であると見られる．

(4) 綠 地 技 法

綠地技法は技法系統としては北歐系であり，おそらくはウィーンのウィナーワルド（ウィーンの都市森林）に起源をもつように見える．ニューヨークにも，セントラルパークとブルスペクトパーク（ブルックリン）をむすぶ綠地計畫(1854 年)があつたが，いずれにせよ大都市出現によつて反省された田園復歸運動の現われであろう．

この技法の實現は，市內計畫案としてはアメリカのカンサス市があり，郊外計畫案としてはニューヨーク地方計畫がある．ニューヨークに對する提案は 1928～1932 年の間に 266 マイル着手を見 136 マイル實現された．またこの綠地計畫の理論的な提案としてはロンドンに對するアンウインの有名な報告がある．(1929～1933 年)

かくして 1924 年のアムステルダムにおける國際都市計畫會議では，將來大都市の計畫にはかならずこの手法を用うべしとした．それ以來ロンドン・モスコー・ベルリン・東京・ニューヨークともきそつて雄大な綠地計畫を行うことになつている．

それならこれらの都市美的意義はどうかというに，それは根本においては結局都市に對する強い自然對比技法で，それは在來の建築個個に對する庭園的對比から，地區的對比に進展したものと見られる．

(5) コルビュジエ技法

かくしてわれわれは最後に，現代都市計畫に對する問題提起者ル・コルビュジェの美學をきかなければならない．とくに彼の美學は徹底的に都市美技法の正統であつて，中世主義を排擊するものである．彼はアンウィン博士の技法を擧示して非難し，このような迂曲した道路形式を採用することは都市美本來の意義に反するものであるとしている．すなわち彼はまず Town is tool という命題をかかげ，すべては機能的に組み立てられるべきものと主張している．

彼の方針にもとずくパリ改造計畫は，

○綠地の中に 1 粁ごとに 16 階 170 呎のビルディングを配置する．

○道路は高架道路である．

○中心部の高架道路の交叉點には飛行場を設ける．

○住宅はしたがつて高さ170呎テネメントハウスである.

というような形式のものになる. これによつて形成される都市美は, 完全に直線形であり機能的である.

(6) むすび

このように技法史の流れを概観すると, われわれはそこに形式上少なくとも3系統のものが存在することがわかる. その一つはルネサンスにはじまり, コルビュジェにより強調された幾何學的なものである. これはローマ・ギリシャの道路が直線であり, 特にギリシャの建築の幾何學性に富むことから考え, ギリシャ・ローマの都市美感覺もおそらくこの範疇に存したものであるように思われる.

次に中世にはじまり (おそらくバビロンの迷路に源泉を見得る) 田園都市論者によつて近代化された「自由形式」とも稱されるような造型形式の一連がある.

さらにまた, おそらくはこれもルネッサンスに淵源すると考えられるが, 特に今世紀地方計畫の提唱にともなつて急に高まつてきた綠地的技法がある. これは以上二つの造型的なものと異り, 主として自然と人生の對比によつて都市美を浮き出させようとする, きわめて自然な造園的な技法である.

これらはいうまでもなくそれぞれ, その發生の導因となつている社會および經濟の實狀に支配されたものと考えられるべきである たとえば都市の機能性を强調するものは, 自ら幾何學的な整型技法を好み, 都市の社會性を尊重するものは, 自由線型の親みやすい形式を採りやすくなる. また都市の本質にふれ, その全活動に價値をおくものは, おのずからその對比物としての綠地に興味をもつことになるのであろう.

いずれにしても, これらはきわめて興味ある問題として, さらに十二分の檢討を要するだろうが, 將來の解說をまつことになる.

II 都市美の概念

以上で一應都市美技法に對する史的吟味をおわつたところでここに都市美に對する觀念の整理を行つて見る.

(1) 都市美要材

「都市美」が都市を構成する要材の組み合わせによつて生ずる美的現象であることはいうまでもない. ただその場合, 要材としてはかならずしも建築物ないし工作物とはかぎらない. その中に存在する植物, 氣象的存在等すべて都市美要材でないものはない.

すなわち都市美要材としてはだいたい次のようなものがあげられるのである.

人工材——建築物. 工作物. (道路・橋梁・その他大工作物). 路上施設 (電柱・街路樹等の小施設). 廣告・看板・照明器具等.

自然材——氣象・植物・岩石・水・山嶽・丘陵等.

これらは晝夜間にわかれて別性格をもつことになる. しかしこれらの都市美要材が, 都市美の舞臺に脚光をあびるにいたつた順序が興味深い. いうまでもなく, 最初都市生活至上時代は, 人工材が主であり次いでルネッサンス以後に自然材が入つたわけであるが, その人工材にしても廣告看板は 18, 19世紀以後現代を盛りとし, 自然材は植物に次いで山嶽, 氣象 (遠望した山嶽の氣象の變化など) の順により, 19 世紀以後急激に採用されだした.

また夜間要素が都市美の重要な位置をしめるにいたつたのも, きわめて近代に近ずいてからである. この夜間要素は, 都市民の晝間生活が機械的になるにしたがい, 夜間の回復作業が必要とされ, 商店街の散策がこれに對し有効であることがわかり, 盛んに用いられるようになつた.

(2) 都市美構成の原理

都市美は以上の要素により組み立てられるわけであるが, その構成に對しては當然一般美學の形式原理が支配するわけで, 「多樣の統一」「通相の分化」等の基礎原理がその主流をなすわけであり, その最も簡單なあらわれがルネッサンスおよび田園都市技法の造型的な形式である.

しかるにこれに對し綠地技法は, 美學上の「對比」の原理によつて都市生活の人生的な內容を浮出させようとするもので, これも當初ルネッサンスにおいては, その幾何學的な技法の强調部に採用されたにすぎなかつたのであるが, 漸次にして量的に扱われるようになり, 現代に入つて綠地帶という名稱に相應する大量的用法をなされるようになつて, そのあり方が明らかになつた.

しかして歷史的には後世にいたるほどこの造型技法は重要度を弱めこれに代る位置を狀態技法が占めて行く形を示しているので, これに應ずる原理としてもこれに順應するものが, 重要さを求めて行くことになるわけである. たとえばコルビュジェのように完全に造型派と見えるものの技法の中にも, これを吟味すれば結局尨大な自然に對し强力な「人間意力」を「直線」・「平面」ないしその機械的くりかえしによつて强調しているように見える.

次に都市美構成において重要なことは, その美的內容の確立である. たとえば古代バビロンの都市構成の美的內容 (きわめて局部的であつたが) は威容表現にあり, ローマ・ギリシャは多少なりとも社會感情の發生を示している. また中世は手工業時代の生活に支配されており社會感情は親和性を加えてきている. ところがルネッサンスになると人間性の解放が高唱され, むしろその活動意欲が誇示されさえしている. 田園都市技法は產業革命に反應する人間回復的感情が內容になつており, コルビ

ュジェは再びルネッサンス的感情にもどるとともに，新しい世代の機械の勝利を感示しようとしているように見える．

これらは都市美の技法において，その内容たるべき目標が吟味されるべきことを教えるのである．

(3) 都市美における變化技法

都市美において「變化」が重要な條件であることはいうまでもない．きわめて單純なルネッサンス技法においてすら，われわれは歩くことにより端景（道路終端の形象）に近ずき，近ずくにしたがつて沿道の街景は變化し端景の大きさおよび細部等は增大し明らかになつて行くこの動的變化は大なり小なり感情要素に影響をあたえないわけには行かない．そこで後世都市美技法が發達するにつれて，意識的に變化技法が用いられだした．たとえばそれには次のようなものがある．

(イ) 恒久性のもの（街路に對して）

○曲　行（これは街側の建築が時時端景にあるもので，おのずから端景が變化することになる．）

○幅員の變化（田園都市派）

○廣場の附設（大小種々）

○點　景（彫刻・噴泉等）

(ロ) 季節的なもの

○綠地施設

○自然景觀

(ハ) 隨　時

○商業美施設（廣告のようなもの）

○祭事施設

そうしてこの技法は，さらに鑑賞方法によつて變化をあたえられることになる．

(ニ) 都市鑑賞の方法

都市美に對し變化をあたえる他の方法として，鑑賞法自體に工夫をあたえることも一法である．すなわち經驗的に鑑賞法としては次のもの等がある．

A：靜鑑賞——水上景觀・丘上景觀

B：動鑑賞——步行（散策）・舟行・車行（ドライブ）空中行

靜鑑賞はその方法の組み合せにより，變化をあたえるのであるが，その中水上景觀はスカイラインの鑑賞に便であつて，都市に對比された水面の靜感覺と，水面に對比された都市の社會感覺との融合はきわめて微妙な効果をもたらす．また丘上からの都市展望は，都市を自然の中に鳥瞰することになり，これに對し切實な社會感覺を湧發させることになる．また遠望によつて一切の都市醜を除去した景觀は，きわめて純乎たる美しさをあたえる．

動鑑賞の中，步行は散策，車行はドライブであり，前者は生活感情が織りこまれ，後者においては機械感の爽快さが入る．ただし空中からの都市美というところまでは，未だ論ずべき時代にはなつていない．

(ホ) 都市美技法の分類

最後に前出にもとづいて都市美技法の諸相を分類すれば次のようになろう．

都市美內容からすれば ——

A　機能性都市美

都市の機能面（今日のところ政治，經濟，交通，時に生產等）のあり方を强調するもの．

B　生活性（あるいは社會生活性）都市美

都市における社會生活面のありかたを强調するもので，おのずから人間的になる．

C　生產性都市美

これは當然生產面の强調であるから，當初の生活性都市美の中に混和されており，現代では機能性都市美の中に融和しているが，やがてこれも分化して獨自の都市美を主張すべきものであるように考えられる．

都市美形式からすれば ——

A　造型性都市美

これがさらにわかれて

幾何學形式のもの（あるいは剛形式）

自由形式のもの（あるいは柔形式）

のものとなる．前者はルネッサンス，後者は田園都市技法がそれぞれ代表する．

B　狀態性都市美

これは綠地技法のように量的の對比により，人間社會の感覺を浮きださせるとか，あるいは地域的に同種同系列の施設を集合させて，その中に量としての美しさを創出しようとするもので，造型的であるよりは全體のあり方により効果をだそうとするものであるから，かりに狀態性の名をあたえた．

III　明日の都市美技法の展望

以上概說したところにより，明日の都市美技法を展望すると，都市美的內容においてはおそらく新しい「生產强調」の性格のものが入つてくるように推測される．それは結局都市廣域化の動きに乘じて，新形態に入ろうとする農村（それを廣域農村というべきか，あるいは都市と名付けるべきか，）の中に，新しい都市美の土壤を發見することになるであろう．

その結果，都市美形式としてはおのずから狀態性のものが强力な基盤となり，强調部を自由形式の造型技法が支配することになるであろう．そこに思想としては，なんとわなしにコルビュジェ形式のものの切りかえが行われる日がくることを推測されるのである．

★　★　★　★